

【資料】

翻刻・広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』(中)

森 下 要 治

A Reformation of "Hyakunin-Isshu fumoto-no-shiori"

in Hiroshima Bunkyo University (2)

Morishita Yoji

はじめに

本稿は、広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』を翻刻し、本誌に三回に分けて掲載、紹介するものである。今回は、前回に続き、第二十三番歌注から第六十番歌注までを掲載する。

本書の特徴については、『広島文教大学紀要』第五十八巻に掲載した拙稿「翻刻・広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』(上)」の「はじめに」に簡記している。

【略書誌】

広島文教大学附属図書館蔵、写本一冊。法量は、縦二三・二二×横一七・〇糎。請求番号「W911.147/H99」。江戸後期写。全六十二丁。表紙左辺に題簽「百人一首麓の枝折」。文化十(一八一三)年閏十一月二十三日、橋頼之序。また、巻末に著者によるものと思しい跋文が

あるが、署名等はない。百首のうち、六十九番歌を欠く。一丁表右下隅に「鷗齋図書之印」(朱文角印、縦四・七×横一・六糎)がある。三十二丁裏から三十五丁表に至る部分に、錯簡をそのまま写したことで文意不通となっている箇所が存することにより、親本から少なくとも一度以上の転写を経たものであると知られる。また、全体にわたって墨また朱による補入、読点、濁点、読み仮名等の書き入れがあるが、本文と同筆か別筆か、定かでない。

【翻字凡例】

- ・ 原本の様態ができるだけ正確に伝わるように、丁と表裏の移る箇所に(一オ)(一ウ)の<sup>ウ</sup>と<sup>オ</sup>を示した。
- ・ 被注和歌の行頭に、『新編国歌大観』所収本による歌番号を付した。
- ・ 注釈文中における被注箇所引用は、ゴシック体で示した。
- ・ 注釈文に引用された和歌・詩・文章等は、前後一文字分を空白にして示した。
- ・ 挿入符号を伴う補入箇所は、「<sup>レ</sup>」で括って本行中に示した。
- ・ 明らかな誤写もそのまま翻字し、必要に応じて右傍に(ママ)と注記した。
- ・ 脱文等があることが明らかな箇所には、(誤脱アリ)と注記した。
- ・ いわゆる見せ消しは、二重取消線によって示した。
- ・ 補入、読点、濁点、読み仮名等の書き入れは、墨、朱ともに存するが、煩瑣なることを避けるため、その違いを明示していない。
- ・ 三十二丁裏から三十五丁表に至る親本錯簡による文意不通箇所は、【※1】から【※6】の注記を本文中の該当箇所に加えることで、本来の注釈文の繋がりを示した。

【翻字本文】

大江千里 古今秋上 是貞のみこの家の歌合によめる(二〇オ)  
23 月みれば千々にもこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

此うたのちゝの説、此百首をはしめ、古今集の説にも人ごとに、ちゝは、千に也、下のちは、はたち、みそち、のちと、同じく、一つ二つの、つにかよひて、ものをかそふる詞也といへり、此説もすつへきにはあらねと、おのれおもふはちゝの、ちは、つにかよふちにはあらず、千々と千を重ねていへる詞にて、月をみれば、感情のあまり、千々さまくと、ものかなしき意也、さて人の説によれば、ちを清てよむべし、おのが説につかば、ちを濁るべし、わが身ひとつの云々は、われひとりに限る秋にはあらぬにの意、此ひとつの(二〇ウ)いへるは、千ゝにといへるにむかへたる詞也、すへて詞はかく、むかへてよむこと也、一首の意は、月をみれば感情に堪かねて、千々さまぐに物を悲しき、さりとて、われひとりの秋といふにもあらぬにと也、白氏文集に 燕子樓中霜月夜、秋來唯爲一人長 とあるを千里儒士なれば、おもひよりてよめるにや、今の世のえせうた人ともすれば、哥にも文にも、からごと引出いふめるぞといともくつたなきわざなりかし、もし古事などはまくほりせば、おほみ國のふることいふこそ雅にはありけれ、中むかしこなたのものに、みやびならぬこと、これかれみゆれと、(二二オ)そは皇國の手ぶり、いたくうしなへる時代なれば、いかにかはせん、

菅家 古今旅 朱雀院のならにおはしましける時手向山にてよめる  
宇多天皇御位をゆつらせたまひて、朱雀院におはしけるころ也、ならにおはしましける時とは、奈良へ御幸ありし時也、手向山は、則なら山のみねのことなるべし、俗

にたうげといふは、たむけの音便にくつれたるなりと、契沖いへり、そは旅ゆく時、山のいたゞきにて、かならず神に手向すれば、それが名のことくなれるなるへし、  
24 此たびはぬさもとりあへず手向山もみちのにしき神のまに(二二ウ)

此度はに、旅をそへたり、ぬさもとりあへずは、俗に用意せざりし意にて、此度は御供の事なれば、幣もえもちあへずと也、幣は旅行人の、山の嶺送のほとりにて、切たる絹をうち散して、神を祭るもの也、神のまにくは、神の御心のまに也、まにといふは、まにくのものにもじひとつ略きたる也、一首の意は、此度は院の御幸の供奉にて、いそぎものし侍りて、幣をもえとりあへざれば、此手向山のもみちのにしきとみゆるを、幣として手向奉る、神の御心のまにみそなはし給へと也、  
三條右大臣 後撰戀三 女のもとにつかはしける(二二オ)  
25 名にしおはゝあふさかやまのさねかづら人にしられでくるよしもかな

名にしおは、助辭也、おはゝは、負てあらは也、俗に名に付てある通りならばといふ意、あふ坂山に、逢という名あり、さね葛は、さは發語にて、ねかつらは、ぬかづら也、ぬるきしるのあるものなれば、いふ、さて寐事を、さねるといふなれば、此草の名に、相寐する名負たり、來るよしの、くるは、かつらの縁語也、一首の意、逢坂山のさねかづらと、名に負たることく、あふてふたりさねばやおもへり、いかでこよひ人にしられずに、來るよし「も」あれかしとねかふなり、もかな、てしかなは、願ふかな也、(二二ウ)  
貞信公 拾遺雜秋 亭子院大井河に御幸ありて、行幸もありぬへき所なりと、おほせ給に、ことの上し奏せむと申て

宇多天皇御位をゆづらせたまひて、亭子院におはしまし  
たる比也、御幸ありて行幸もありぬべき所也とは、天皇  
もみゆきありて、此もみちを御覽せらるべき所なりと、  
院の仰せ給ふ也、今上帝のいてましを、行幸とかき、院  
のいてましを、御幸とかきて、ことをわけたり、いづれ  
もみゆきとよむ、さてしかことをわくるは、後世のさだ  
也、上つ代にはさるさだなし

26 をぐら山みねのもみちばこ、ろあらば今一たひのみゆきまたなん  
(二三才)

小倉山みねのもみちばよと、よをそへて意得へし、みゆきまたな  
んは行幸を待合せて、ちらずにあれといふ意也、一首の意、も  
みちばよ、汝も情があらば、今院の御幸ありて、行幸もありぬ  
べき所なりと、仰られたれば、そのよしを奏聞せば天皇もいで  
まし給はん、いかで今一度大君の行幸をまてと、紅葉に今人命也、  
中納言兼輔 後撰戀五 女のもとへつかはしける

27 みかの原わきてながる、いづみ川いつみきとてか戀しかるらむ  
わきてながるゝは、湧て流る也、三句はいつみといふ詞を、か  
さねて序とせり、いつみきとては、俗にいつみた事か、(二三  
ウ) まだみたこともなきにといふ意也、一首の意、まさしく人  
をみたらんにこそ戀しからめ、いつみたことぞ、まだ見もせぬ  
に、いかなればかくまでは戀しからんと也、

源宗于朝臣 古今冬 冬のうたとてよめる  
28 山さとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

人目のかるゝは、人のとひ來ぬをいふ、そを草の冬かれにかね  
たり、一首の意、山さとは、いつもさびしけれど、わきて木草  
も枯人めも離て冬はさびしきと也、かれぬと思へは、た、か  
れぬれば、といふに同し、おもふに心なし、そへたるもの也、

此例古言に多し、(二四才)

凡シ河内躬恒 古今秋下 しら菊の花をよめる

29 心あてにをらばやをらんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

心あては、俗にいふ推量也、をらばやの、やは、打返しつやに  
て、をらばやは、をらん心あてには折られぬといふ意、置まどは  
せるは、霜のおきて花と見まかはせる也、一首の意は、大かた  
のおしあてに、折んとていかでかをりえんたやすくは折がたし、  
はつ霜のましろに置まかへたる、此籬の白菊はと、いふ意也、  
壬生ノ忠峯 古今戀三 題しらす

壬生を加茂翁はにぶとよめりされとなをみぶとよまん歟  
(二四ウ)

30 有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうき物はなし

有明のは、有明の月の也、つれなくは、俗にしんぼうづよいと  
いふ程の意、つらきと、ひとつに心得へからず、さて此句は月  
にのみか、れり、女のつれなきをそへたるにはあらず、ばかり  
は、俗にほど、いふ意にて、あかつき程也、一首の意は、先つ  
ふし女にあかずわかれし時、有明の月をみしが、あはれ月は、  
夜のあくるをもしらずかほに、つれなくものこれるものを、わ  
れはあかすわかるゝことかなと、身にしみてかなしかりしが、  
其時より世にあかつきはかり憂くつらきものは、又なきやうに  
おもはるゝと也、此哥を契沖あは(二五才)ずして、歸りたる  
也と、いはれたるは、古今集の入所に、なづめるひがこと也、  
顕昭のいはれたるやうに、逢て別れたるなり、古今集は撰の誤  
也、六帖も古今によりて誤れり、

坂上是則 古今冬 やまとの國にまかれる時、雪の降けるをよめる  
31 朝ほらけ有明の月とみるまでによしの、さとにふれる白雪

朝ほらけの、ほらけは、朗明のつゝまりたるにて、よの明がた

也、或人の説わろし、一首の意、よのほのく〜とあけゆく比、  
 たちいで、みれば、あり明の月のかけかとみゆるばかりに、よ  
 しの、さとに雪のふれると也、(二五ウ)

春道列樹 古今秋下 志賀の山越にてよめる

32 山河に風のかけたるしがらみはななれもあへぬもみちなりけり

ながれもあへぬは、流も不<sup>ク</sup>レ<sup>ユ</sup>堪<sup>ズ</sup>にて、えなかれずに、よとむ意  
 也、一首の意は、山川に風のふきもてきて、柵をかけたるか  
 見えしは、えなかれずにと、まれる、もみちばなりと也、

紀友則 古今春下 さくらの花のちるをよめる

33 久かたの光のどけき春の日にしづこ、ろなく花のちるらん

久かた<sup>ハ</sup>、天の枕詞ながら、こ、はたゞに天をさしていへり、  
 のどけきは俗に、春日遅しなどいふ意にて、ゆるやかなること  
 となり、暖なる意にてはあらず、一首の意は、春の日のうら  
 (二六オ)、うらと、風たになくて、長閑なるに、いかなれば、  
 かく心いそがはしく花はちる哉と也、花のちるらん、の、は、  
 花やちるらん、やにおなし、

藤原興風 古今雑上 題しらす

34 誰をかもしる人にせん高砂のまつもむかしの友ならなくに

しる人とは、友だちのこと也、そを詞をかへて、上下におけ  
 り、高砂は、山の名也、名所とひとつにな、こ、ろえそ、むか  
 しの友は、俗にむかしなじみといふ意也、一首の意は、今は誰  
 を友としてまじはらん、むかしのしる人は皆死うせて、たゞ  
 我ひとりのみながらへたり、世に久しきものと(二六ウ)いへ  
 ば、尾上にたてる松なれどその松はむかしよりの友だちにては  
 なきといひさしてなげく意をふくめたり

紀貫之 古今春上 はつせにまうづるごとに、やどりける人の  
 家に、ひさしくやどらて、ほどへてのちにいたれりければ、

かの家のあるし、かくさだかになん、やどりはあるといひ出  
 して待ければ、そこにたてりける、梅を折てよめる

初瀬にまうづるごとにとは、年ころはつせにまうづる  
 度にの意、さだかは、たしかなる意(にて) 相かはらず  
 ある也、さてかくあるしがいふ故は、かやうに何ひとつ  
 かはりたること(二七オ)もなく、此やどはたしかにあ  
 るに、久しくもやどり給はぬは、家を見違て外の家にや  
 どられしかといふたはぶれなり、たてりけるは、生<sup>ハ</sup>てあ  
 る也

35 人はいさ心もしらずふる郷は花ぞむかしの香に匂ひける

人は、あるじをさす、いさは否にて、俗にどうであらうぞと  
 いふ意也、心もしらずは、人の「心の」かはりしか、かはらざ  
 るをしらぬ也、此かはる、かはらぬといふ意は、下の花ぞむか  
 しのとある、ぞもじよきこゆる也、うたはずてにをはに  
 て、詞の外の心をもきかすものなれば、初學ひのほとより手に  
 をはを、味ひ覺ゆへきわざ也、ふる郷はなじみの家なり、わが  
 故郷といふにはあらず、一首の意は、あるじの(二七ウ) 心<sup>ハ</sup>  
 かはりしや、かはらずやさたかにはしらねど、なじみしやどの  
 此梅のはなは、むかしのことく香に匂へると、あるじが詞のく  
 ねくしきにこたへたる也、

清原深養父 古今夏 月のおもしろかりけるよ暁かたによめる

36 夏のよはまたよひながら明ぬるを雲のいづこに月やとらん

まだよひながら明ぬるとは、夏のよのいたく短きをいひなした  
 る詞也、一首の意は、夏のよのみじかさよ、まだ宵なるに明た  
 り、月は山のはに入る間もあるまじを、雲のいづかたに影のか  
 くれしにやと也、夜の短さをよひながらあくるといひ、山へ入  
 し月を雲にかくれたるやうに(二八オ) いひなしたり

文屋朝康 後撰秋中 延喜ノ御時ノうためしければ

37 しら露に風のふきしくあきの、はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

ふきしくは、吹しきる也しきるといふは、古言に重々シツクといふとおなじくて、俗に引もきらずといふ意也、俄に吹立ることにはあらず、一首の意は、しら露のおきわたしたる、あきの野に風が吹つゝきて、つらぬきとめんとする玉を貫きあへず、うちちらすやうに、露の玉かちるといふ意也、いにしへは糸もて玉を貫きて身のかざりにつけし也、草葉の上に所せき露の玉をそれみたて、よめる也、(二八ウ)

右近 拾遺戀四 題しらす

38 わすらるゝ身をばおもはずちかひてしひとの命のをしくもあるかな

わすらるゝは、人に見捨らるゝ也、身をばおもはずはわか身の人にわすられしことは、おもはぬ意也、一首の意は、我身のわすられしことはあきらめて、うらみにもおもはねど、互にかはらじわすれしと、神佛にちかひしことなれば、忘れた人の命はあるまじ、それがをしきと也、

参議等 後撰戀一 人につかはしける

39 あさぢふのをの、しの原忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

上の二句は、しのといふことを、重ねて序とせり、忍ぶれ(二九オ)どあまりては、忍ぶにあまりてほにあらはるゝ也、忍ふといふ詞につゝむ意と、隔る意と、したふ意との、三つのけぢめあり、こゝはつゝみかくすとすれと、つゝむにあまる意也、などは俗になぜにといふ詞也一首の意は、かくし忍ふとすれと、つゝみあまりて、ほにあらはるゝ、なかまくまてには、人の戀しからんと也、

平兼盛 拾遺戀一 天曆御時ノ哥合

40 忍シ(ふ)れと色に出にけりわか戀はものやおもふと人のとふまで

翻刻・広島文教大学蔵「百人一首籠の枝折」(中)

しのふれどは、つゝむとすれと也、色に出にけりは、顔色にあ

らわれたる也、一首の意は、戀しさを、つゝみかくすと(二九ウ)すれど、おもひにあまりて、何そものおもひをするかと、人のとふ程に、顔いろにあらはれたり也、三一四五二と句を轉して心得へし、

壬生忠見 拾遺戀一 天曆ノ御時ノ歌合

41 戀すてふわが名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしシか

戀すてふは、戀すといふこと也、てふはといふのいもじ略きて、とト、てト、通はせたる也、古言には、とふ、又ちふなどいへり、まだきは、早き也、一首の意、我戀すといふ名が、はやくも立しことかな、まだおもふ人にすら、いひ出しもせず心ひとつにおもひそめたるものと也、(三〇オ)

清原元輔 後拾遺戀四 心かはりける女に人にかはりて

42 ちぎりきなかたみに袖をしほりつゝ、末の松山浪こさしとは

ちぎりは、手握テニグの約ツめにて、手と手ととりかはして言束コトツツをいふ、俗に契約といふこと也、なは嘆息ナツキの辭、かたみには、互タガヒに也、袖をしほりつゝは、涙にて袖のぬれたるをしほりし也、末の松山浪こさしとは、古今集東歌に「君をおきてあだし心をわがもたは末の松山なみもこえなん」とあるをとれり、本歌の意は、君をさしおきて外心をわがもたは、かなたの沖の波が、こなたの松山はよもこさじこさぬ限りは、かはらしと、言つがひせし也、さてその本(三〇ウ)歌の契を、我ちぎりしごとくいひなしたり、一首の意は、互に袖をしほりながら末の松山波はよもこさじこさぬ限りは、わか心もかはらじと、かへすく契約チギリにてはなきか、それをわすれてはや心がはりせしことよとなげく也、海の浪が山をこゆることは、世になきことなれば、なきこととり出て誓言チカガヒせし也、

中納言敦忠 拾遺戀二 たいしらす

43 あひ見ての後の心にくらぶればむかしはものをおもはざりけり

むかしとは、逢ざりしさきのこと也、一首の意は、いまだ逢ざりしほどは、あひみて後こそものおもひはある(三三才)まじとのみおもひし<sup>キ</sup>、さはなくて、逢み<sup>ル</sup>れ<sup>テ</sup>こなたの物おもひにくらべては、あはぬむかしは物おもひのなかりしと也、

中納言朝忠

44 あふことの絶でしなくは中々に人をも身をもうらみざらまし

たえてしの、しは、助辭なり、中<sup>ノ</sup>は、却てといふ意、俗になまなか、又けつく、なといふ詞にあたる、うらみざらましは、うらみずにあらんの意、一首の意、あふといふ事のたゑてなくはとても縁なき中とおもひとまりて、こゝろあさき人をも、数ならぬわが身をも、うらみざらましを、かへりて稀<sup>ク</sup>逢みる故、えおもひあきら(三三才)めで人のあさきをうらみたり、いとほる、わが身をうらみたりするなり

謙徳公 拾遺戀五 ものいひ侍ける女ののちにつれなく侍てさらにあはす侍ければ

ものいひとは、ちきりあひたる中<sup>ノ</sup>中なり、さらにといふ詞は、ふた、びといふにちかくて、俗にいふとは別也、又とあはぬ意也

45 あはれともいふべき人はおもほえず身のいたづらになりぬべきかな

あはれは歎息したる聲也、今も俗にあらは<sup>カ</sup>やしかたがないなどいふは、則この詞也、さてその長息を<sup>イメ</sup>寐<sup>イキ</sup>の辭(三三才)にしてよきあしきうれしきかなしきをはじめ何ことにまれ、切におもふ時はあはれといふ也、こゝは俗に【※1 この後に脱文あるか、※4 直後の「おもほえず」に続く】

【※2 以下、48番歌注の続き】か、れり、おのれのみは我は

かりものおもひをして人はわれをおもはぬ也、一首の意は、人はわれをいさ、かもおもはぬに、われのみさま<sup>ク</sup>に心をくだきて、此ころは物おもひをする也、

大中臣能宣朝臣 詞花戀二 たいしらす

49 御垣守<sup>ミツ</sup>ゑじのたく火のよるはもえて晝はきえつ、物をこそおもへ

御垣守は、大内の御<sup>ツ</sup>籙也、衛士は國々より上りて内裏を守る兵士を云、さて此二句は序也、よるはもえての下に物をおもひといふ詞をそへてみるべし、下の句のいきほひ(三三才)にてきこゆ也、もゆるは、おもひにむねをこがすこと也、ひるはきえつ、は、晝は魂もきゆるやうにおもひいる也、一首の意は、よるはもえたつやうにむねをこがして物をおもひ、晝は魂もきえ入るやうにうちしめりて、物をおもふと也、

藤原義孝 後拾遺戀二 女のもとよりかへりてつかはしける

50 君かためをしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな

君か爲の爲は、こゝは、俗にゆゑにといふ詞にちかくて、君がなさけゆゑにといふ程の意也、さて此初句は三の句へ轉して意得へし、をしからざりし命さへは、昨夜<sup>ヨ</sup>まではあふにかへてをしからざりし命也、さへは、花のさかりに(三三才)月さへ晴たりなどやうに、もの、そふ時にいふ詞にて、俗にいふさへとは心異也、万葉集に副兼<sup>サカス</sup>なとかけるにても意得へし、或説にさへは、そのうへの約めなりといへり、然るへきか、だにとひとつに心得べからず、ながくもがなはながくもあれかしの意、逢みてゆく末のちきりを長かれとねがふにつけて命兼<sup>イフチサヘ</sup>長かれとねかななり、おもひけるかなは、よべ逢みし時おもひし也、けるかなは過去也、一首の意は、よべまでは逢にかへて、惜からざりし命の、あらは<sup>カ</sup>やかは<sup>ハ</sup>ゆひことやともといふ意也、【※3 以上、※6 直後の「一夜の」に続く】

【※ 4 以下、※ 1 の 45 番歌注の続き】おもほえずとは、こゝはおもひあたりのなきこと也、いたづらは、俗にむだといふにて、こゝは(三三ウ)むだ死也、一首の意は、こがれ死にしぬるとも、今はあはれいとをしやといふ人のおもひあたりはなくて、身をいたづらに盡すへきかなとなげく也、かくいへば、則戀死をしてもつれなき女があはれとおもほはぬことを恨みたる意になる也、今俗にあてこすりといふ程の心はへ也、  
曾根好忠 新古今戀一 題しらす

46 ゆらのとをわたる船人かちをたえゆくへもしらぬ戀の道かな

ゆらのとは、難波門、あかしの門などにおなじくて、船のゆきかふ水門也、かちをたえは楫カサをうしなふ也、上ノ句は序ながら意をたとへていへり、大わたにて船ひとがかち(三四オ)をなぐせしごとくいづくをはかとも、ゆくへのしられぬものは戀の道かなといふにて、一首の意明らか也、

惠慶法師 拾遺秋上 河原院にて、あれたるやどに秋きぬといふ

47 八重葎しげれるやどのさびしきに人こそみえね秋は來にけり

やへむくらは、葎のいくへもかこみたるにて、荒屋さま也、人こそみえねは、人の來ぬ也、下のあきはのはもじに、てらしみるへし、一首の意は、かく荒たるやどのことなれば、誰とふべき人こそなけれ、あきはなをくると也、

源重之 詞花戀上 冷泉院東宮と申けるとき(三四ウ)百首のうち

たたてまつりける

48 風をいたみ岩うつなみのおれのみくたけてものをおもふころかな  
風をいたみは、風がつよきに也、上の二句は序也、句をへだて、くたけてへ【※ 5 以上、※ 2 直後の「か、れり」へ続く】  
【※ 6 以下、※ 3 の 50 番歌注の続き】一夜のあふせのうれ

しき、君がなさけゆゑに、又末のちぎりを長かれと願ふにつけて、命さへ長くもあれかしとおもふと也、末のちぎりをねがふこと、詞のうへにはなけれど、さへといふ詞のいきほひと、一首のおもふきとにこもれりと、或人も已にいへり、さて此哥上の二句すへて人々のいへる趣にては、君が爲は君かつれなかりし故に也惜からざりしは、そのつれなさに生てをるかひもなくて、(三五オ)命のをしからざりし意也、いづれかよけんおのれ一わたりはいふもの、えさだめずなん

藤原實方朝臣 後拾遺戀一 女にはじめてつかはしける

51 かくとだにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆるおもひを

かくとだには、せめてかやうにおもふとなりとも也、だにといふ詞にその意あり、えやはの、やは、打返し聞す、てにをはにてえやはいふことか、えいはねばの意也、それを名所の伊吹にいひかけたり、さしも草は、一首の詞のしたてにとり出たるにて、哥の意にはあ(づ)からす、さしもといふ詞をた、みていへりさしもといふ詞は俗にさうもと(三五ウ)いふに同じ、しらしなは、人はさうともしらしにて、なは、嘆息の聲也、もゆるは、さしも草の縁語也、一首の意は、せめてかくおもふとなりと、えやはいふことか、えいひ出ねば、おもひにもゆるわがこゝろを、人はさうともしらしなとなく也

藤原道信朝臣 後拾遺戀二 女のもとに雪のふりける日かへりて

つかはしける

52 明ぬればくる、ものとはしりながら猶うらめしき朝ほらけかな  
なほは、俗にやはりといふにて、いよくの意にはあらず、一首の意、夜があくればやがてくれ、暮れは又行て、逢ん(三六オ)ものとはしりながら、さしあたりてわかれがかなしさに、やはり朝ほらけが、うらめしきと也

右大將道綱母 拾遺戀四 入道攝政まかりたりけるに、門をおそくあければ、立わつらひぬといひ入て待ければ、よみて出ける

まかりたりけるに、かよひ來りし也、立わづらひぬとは、俗に立くたびれたといふ程のこと也、いひ入ては、門外よりまだあけぬうち詞にていひ入し也、よみて出けるは、門外に立給ふ所へよみて出せし也

53 なげきつ、ひとりぬるよの明るまはいかに久しきものとかはしる  
歎きつ、はなげきながら也、ひとりぬるよの明るまは(三三六ウ)の、はもじに、門をあくる間はいさ、かなる意をきかせたり、いかには、こ、は俗にどれほど、いふにあたる、かはの、は、かるく添たり、一首の意は、わづか門(の)戸をあくる間をだに、立わつらふとの給ふが、まち／＼てこよひも又來給ぬかとうち歎きながらひとりぬる、其夜のある間はいかほど久しきものとか、しり給ふと也

儀同三司母 新古今戀 中關白かよひそめ侍けるころ

54 忘れじの行末まではかたければけふをかきりの命ともがな

わすれじのは、わすれじとたのめ給ふ詞也、かたければ、行末まではたもちかたければ也、一首の意は、今こそ(三七七オ)忘れしとの給へ、いく末ながくはたもち給ひかたければ、わすれぬうち、今日を限にしてこ、にて死まほしき(と)也、  
大納言公任 千載雜上 嵯峨の大覺寺にまかりて、ひと／＼うたよみ侍けるに、よみはへりける

55 瀧の音は絶て久しくなりぬれど名こそながれて猶聞えけれ

名こそながれては、大覺寺の瀧殿といひて、世に名高く聞えし也、ながれては、瀧の縁語也、猶は俗にやはりといふにあたる、きこえければ、世に其名のこりてきこゆる也、此詞も

瀧の縁語也、一首の意は、大覺寺の瀧は絶て久しくなれど、もと名高く聞えし瀧殿な(三七七ウ)れば、其名は世にのこりて今もやはり、もとのま、にもてはやすと也、

和泉式部 後拾遺戀三 こ、ち例ならず侍ける比、ひとのもとにつかはしける

56 あらざらん此よの外のおもひ出に今ひとたびのあふこともかな

あらざらんは、此よにあらざらんにて、死ぬる意也、此世の外は、則後の世のこと也、おもひ出に、おもひ出しぐさにも、一首の意は、かやうに病あつしくなりて、とても此世にながら(へ)んこと叶はねば、せめて後の世のおもひ出しぐさに、今一たびのあふよしもあれかしと也、(三三八オ)

紫式部 新古今雜上 はやくよりわらは友だちにて、侍ける人のとしごろへて行あひたるが、ほのかにて七月十日あまりの月にきほひて歸ければ、

はやくよりは、さきたちて也、行あひたるは、途中にてゆきあひたる也、ほのかにては、あからさまにて、俗にちらりと、いふ詞に當る、月にきほひては、月のいるにまけじと、きほひて歸るにて俗に月のいらぬうちに、歸るべしなといふ意也、

57 めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな

めぐりは、月の縁語也、みしやそれともは、あひみし人は、其人か、その人にてはなきか也、雲がくれにしは月の山へ入(三三八ウ)しを、人の歸りしにそへたる詞也、一首の意は、稚なじみの人に、ひさ／＼にてめぐりあひて、まだ其人かとも見わかぬうち、あかすもみうしなひたることかなと、月にきほひて歸りし人を、月にそへてをしめる也、

大貳三位 後拾遺戀三 かれ／＼なるをとこのおほつかなくなど



いひたるによめる

かれくなる男のは、とだえかちにかよふ男の也、おほ  
つかなくは、こ、は疎き意也、

58 有馬山ゐなのさ、原風ふけばいでそよ人をわすれやはする

ありま山は、ゐなのさ、原をよび出ん料のみ、笹原風ふけ  
ば、(三九才) 笹に風ふけばそよくと音のするものなれば、  
いてといふ詞を隔てぞよといふべかる序也、いではこ、は、俗  
にさあといふ詞のいきほひ也、そよは、それよ也、わすれやは  
するは、わすれはせぬものをといふ意也、一首の意は、男のお  
ほつかなくなどいひし詞をうけて、さあそれよそなたよりこそ  
疎くはしたまへ、こなた人をわすれたことか、わすれた事はな  
きと也、

赤染衛門 後拾遺戀二 中關白少將に侍ける時、はらからなる人

にものいひわたり侍けり、たのめてまうでござりける、つと  
めて女にかはりて(三九ウ)

はらからは、同じ腹の兄弟也、ものいひわたりは、兼て  
心かよはしたる意也、たのめては頼せてにて、來んと契  
りて、女の心にたのみにさせたる也、つとめてはあくる  
日の朝なり、

59 やすらはでねなましものをさよふけてかたぶくまでの月を見しかな

やすらはでは、ためらふ意にて、こ、は、ねずに待てをりしこ  
と也、ねなましものをは、はやく寝んものをの意也、ましは、  
んにおなし、一首の意は、ためらひをらずに、はやくねなんも  
のを、こよひ來んと給ひし故、それをたのみにおもひて、月  
のかたぶくまで待てをりしと也、

小式部内侍 金葉雜上 和泉式部保昌にぐして丹後(四〇才) 國  
に侍ける頃、みやこに歌合のありけるに、小式部内侍哥よみ

にとられて侍けるを、中納言定頼、つほねのかたにまうでき  
て、哥はいかゞせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしけんや、つ  
かひはまうで來ずや、いかに心もとなくおほすらん、などた  
はふれて立けるを、引と、めてよめる、

和泉式部は、小式部が母也、保昌は、和泉式部が後の夫  
也、ぐしては、たぐひて也、哥よみにとられては、哥  
合の人数に入られし也、局のかたは、小式部が部屋  
の方也、いかゞせさせ給ふは、哥合のうたはよませたる  
歟、いか、し給ふといふ也、丹後へ人はつかはしけん  
や(四〇ウ)は、母の式部に添削か代作をたのみに人を  
つかはしたるかといひて嘲哂也、その頃小式部が、うた  
は、母の式部がよみてやるなどいふとりさたせしなるべ  
し、つかひはまうで來ずやは、丹後へつかはしたる使  
は、また歸り來らぬかと也、心もとなくは待遠き意也、

60 大江山いく野のみちのとほければまだふみも見ず天のはし立

大江山、いく野、いづれも丹波にて、丹後へ行道すがらなり、  
まだふみも見ずは、橋に、文をかねたり、天の橋立は、丹後に  
名高き名所なれば、こ、は丹後國をさしていへる也、一首の意  
は、大江山といふ高き山に、いく野と云(四一才) 廣き野を過  
て、ゆく遠き丹後のくになれば、まだふみもみぬと也、

(以下、続く)

— 二〇二四年九月二十四日 受理 —